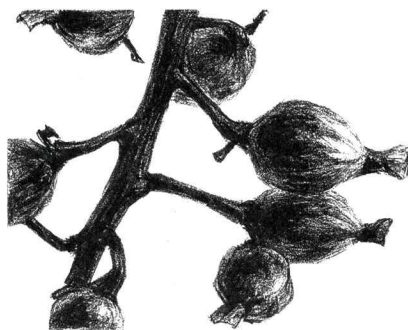


# 朝日歌壇俳壇



〈ゲットウⅢ〉 日高理恵子

## 短歌時評 なにも見えねば

小島 なお

〈言葉の魔術師〉と呼ばれた塚本邦雄、〈現代の巫女〉と呼ばれた山中智恵子。その才を戦後歌壇に輝かせた両歌人の師であり、「現代短歌の発端」として比類のない作品世界を展開した前川佐美雄。代表歌集『植物祭』、『大和』を完本で収録した三枝昂之編『前川佐美雄歌集』（書肆侃侃房）が刊行された。

春がすみいよ濃くなる真昼間のなにも見えねば大和と思へ 春霞が濃く深く立ちこめる真昼時。見渡すかぎり何も見えないのなら、そこは大和と思え。歌集『大和』刊行の昭和15年は、文化思想団体の政治活動が全面禁止され、文学に戦時体制が敷かれた年であった。この歌を私は先行きの見えない時代の不穏な視界と解釈してきた。しかし編者の三枝はこう指摘する。「(時代への失意も踏まえつつ)〈見えねばこそ大和の本質〉といった、歴史が濃厚く堆積した大和の国論と読みたい」。時代の読みから自由になることで、短歌の

普遍性に手を伸ばす解釈である。第一歌集『植物祭』が刊行された昭和5年、歌誌「心の花」で当時の佐美雄は短歌の革新について「新しい角度から見る」たゞそれだけである」と明快に語っている。ぞろぞろと鳥けだものをひきつれて秋晴の街にあそび行きたし 『植物祭』戦争のたのしみはわれらの知らぬこと春のまひるを眠りつづける 新しい視界のめぐるめく 『植物祭』かな、なにも見えない『大和』へ。戦争を、日本を見ようとみひらく歌人の眼がある。(歌人)

柿本多映句集「ひめむかし」 蛇笏賞俳人の最新句集。「ひめむかしよもぎの話年移る」「筵より虫とびたつみちのくは」「地球只今戦火をかかへ鳥雲に」(深夜叢書社・3080円) 川名大著「昭和俳句史」 副題は「前衛俳句～昭和の終焉」。昭和30年代の前衛俳句の勃興から、50年代からの俳句の大衆化・戦後世代の新風まで詳述。(角川書店・3520円)

風信

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。

### ◆大串 章選

- 一生を香車のごとく秋彼岸 (長崎市) 石井 治  
亡兄の誕生日なり栗(こ)はん (東京都) 酒光 幸子  
推敲の筆の重さやけふの月 (長崎市) 下道 信雄  
移住者がいきなり主役村芝居 (栃木県壬生町) あらみひとし  
岸壁に釣人ひとり望の月 (加古川市) 森木 史子  
敬老日白寿の母は眠りをり (加須市) 大塚 宗子  
点滴のリズムに釣瓶落としかな (小城市) 福地 子道  
分れ道草の花ある右の道 (横浜市) 本松健治郎  
猫じやらし戯れるに飽きて知らぬ振り (郡山市) 長谷川朗徹  
人間に付かず離れず赤とんぼ (富士宮市) 渡邊 春生

【評】第1句。香車のように真っ直ぐ前へ進んで天寿を全うされた。「香車」は将棋の駒の名。第2句。今日は亡くなった兄の誕生日。兄が好きだった「栗ごはん」を一緒に頂く。第3句。推敲は簡単ではない。名月で心を洗い真摯に挑戦する。

### ◆高山れおな選

- 秋風や一人多芸のちんどん屋 (長崎市) 下道 信雄  
日のぬくみありし団栗拾ひけり (泉大津市) 多田羅初美  
満月や狸が出れば日本国 (塩尻市) 古厩 林生  
秋蝶采蜜はむらさきの花にある (奈良市) 藤岡 道子  
どこまでも雲の流るる野分あと (いわき市) 岡田 木花  
虫の闇かたりと星座組みかほり (松山市) 杉山 望  
豆腐屋さん屋は眠れる車二台 (江田島市) 和田 紀元  
点点と棚田の村の秋灯 (玉野市) 加門 美昭  
白黒の月面秋風の茶の間 (川越市) 横山由紀子  
助手席の犬も風切る秋の屋 (下関市) 内田 恒生

【評】下道さん。一人練り歩いているのか、集団の中の一人を指すのか。どちらにせよ多芸がかえって寂しさを掻き立てる仕組み。多田羅さん。繊細な皮膚感覚。古厩さん。月夜の狸囃子もまた、桜や茶の湯にも劣らぬ日本の情趣ならずや、と。

### ◆小林貴子選

- 彼岸花救荒食でありしとは (熊谷市) 松葉 哲也  
名月を目指して上がる楢円球 (名古屋市中区) 池内 真澄  
泊夫藍や蘭字という言葉古り (伊万里市) 萩原 豊彦  
死に對した青二才竹の春 (三鷹市) 宮野隆一郎  
案山子の句でできないうちちりにけり (いわき市) 馬目 空  
秋の夜の灯火一火守りけり (東京都) 長谷川 瞳  
角伐られ鹿は飛火野とほとほと (東京都) 川瀬 佳穂  
AIに地球の平和問ふ夜長 (宝塚市) 上田 光子  
団栗も並べられると背伸びする (兵庫県太子町) 曾我 悦子  
縄文は最近のこと天の川 (塩尻市) 古厩 林生

【評】一句目。彼岸花の根には毒性があるが、いつの時代か、水に晒し食用とされていた。遙かな歴史。二句目。フランスにて行われたラグビーの試合、その夜は中秋の名月。三句目。蘭字に寄せる感慨に、薬用・香料のサフランがよく響く。

### ◆長谷川權選

- 初恋のやうに仰ぐやけふの月 (長崎市) 下道 信雄  
食べ終り秋蚕ははばし腹脹す (前橋市) 荻原 葉月  
鬼やんま交尾めば生るる大八洲 (藤沢市) 朝広三猫子  
ルオー描く絵やキリストの月の道 (船橋市) 斉木 直哉  
集金の人が来るだけ敬老日 (所沢市) 岡部 泉  
途切れときれの秋の雨だれ光堂 (横浜市) 正谷 民夫  
草の葉の先に蝗の重さかな (静岡市) 松村 史基  
あといくつ打たねばならぬ鉦叩 (三鷹市) 田中 進  
標的の基地の沖繩蟻地獄 (福島県伊達市) 佐藤 茂  
虫鳴くや鳴き継ぐ老のかすれ声 (青梅市) 市川 蘆舟

【評】一席。いくつになっても、みずみずしい中秋の名月。「初恋のやう」とはすばらしい。二席。満腹のうたた寝か。秋の蚕らしい。三席。野蚕な創世神話。大八洲は日本列島。秋津島(トンボの島)とも。十句目。虫よ、お前もか。